さらしなの里

友の会だより

第１８号　　２００８・春

御神木のもとに冠着大学

山を守り、山をつかさどる神を山の神といい、各地の山の入口や山中には、神霊が招き寄せられ乗り移るとされる御神木があり、その根元に山の神が祀（まつ）られています。仙石には区有林の御林（おはやし）入口と、冠着山入口の二カ所にありますが、今回は姨捨伝説に登場する冠着山の通称、仙石登山口にある山の神と御神木について紹介します。

仙石登山口にある山の神は、推定樹齢三百年という赤松の御神木とともに仙石林道の傍らにあり、家庭の燃料が木材中心であった昭和三十年代まで、地元をはじめ多くの地域住民が冠着山の恩恵に授かりました。

現在は、車で通過することが多いため立ち寄る人は少ないが、この場所も区有林の一角で御神木と祠（ほこら）の周りは広場になっている。林道ができる以前はここに荷車を止めて山に入る人や、自宅から背負子を背負って出かけた人たちが、御神木の松が水平に広がる枝の下でまず一服して休憩をとり、山の神に安全を祈願して山に向った。夕暮れになるとそれぞれが焚き木を背負ってここへ集まり、背負子の荷を整えてから各々の家路についた場所として知られています。

冠着山の思い出を語る年配の皆さんが、青年時代は毎日竹製の弁当に握り飯を詰めて山に出かけ、現場では仲間同士のいろいろな情報交流があったから、冠着山を冠着大学と言うくらい、山仕事を楽しんだと懐かしそうに話してくれます。冠着山が、地域住民にとって大切なコミュニティーの場所であったということでしょう。

こうした光景を、山の入口で見守り続ける山の神の御神木が、衰弱して枝枯れが目立つようになったため、十数年前には仙石区の役員を中心に枯れ枝を整理して環境を整備したほか、毎年の年中行事である区有林の管理作業でも、区長さんをはじめ区の役員が御神木と周辺の下刈り作業を入念に行なっており、徐々にその効果が表れているようです。御神木の隣に二代目も成長しつつあります。山の安全と地域の発展を見守り続ける山の神とともに、永く御神木として語り継ぐよう保存したいものです。

（前さらしなの里歴史資料館館長・小松勝）

文化・芸術楽しむ更級人「風月の会」

一日に一回でも何かに感動したり幸せを感じる瞬間はありますか。

九年ほど前、友人の家から子犬をもらってきて以来、羽尾の吉野沖から八幡沖にかけてのコースが愛犬ペロとの散歩コースです。最初は散歩させていたつもりでしたが、近ごろでは少々高めの血圧と脂肪燃焼のためにお付き合いしてもらっている感じです。

私たちが毎日歩くそのコースからは、更級の里はもとより善光寺平が一望できます。澄んだ空気と素晴らしい景色の中を歩きながら小さな幸せをかみ締めています。

昨年の夏ごろ、地域の先輩方より「更級人（さらんど）『風月の会』」のお話をいただきました。永い歴史と文化に彩られたここ更級の地について学び合い、この地に暮らす人々によって故郷を再発見しようというものでした。更級の里ははるか古より月の名所として詩歌に詠まれ、物語や紀行文としても多くの作品に残されています。

しかしここで暮らす私たちはその素晴らしさを実感しているでしょうか。おそらく忙しい日常の中で考える余裕など無いのが現実だと思います。だからこそ年に数回でも更級について学びこの地で生きていることに喜びや誇りを持つことができたら故郷に対する意識が少しずつでも変わってくるのではないでしょうか。

昨年十月、さらしなの里展望館において「更級人『風月の会』」の発足会として月見の会が開催されました。六十名ほどの皆さんと月の文化について語り、お酒を酌み交わして親睦を深めることができました。

ことし三月には羽尾の明徳寺でギターコンサートが開かれました。更級地区でコンサートが行われたことは画期的なことでした。百名を越す大勢の皆さんが集い、楽しいひと時を過ごしました。

まだ歩み出したばかりの「更級人『風月の会』」ですが、これからも地域に根ざした活動をして文化や芸術の交流を図り、みなさんと豊かな時を共有できたらと思っています。

（森智恵美）

地域の言葉と挿絵で「羽尾の民話」

地域での認知度は「縄文まつり」よりもはるかに低いのですが、更級小学校を中心に「コネット更級」が活動を始めて五年の月日が流れました。学校が週五日制になるのを受けて「子どもたちは地域の宝」「地域の子どもは地域で育てる」の理想の下、土曜、日曜の「子どもの居場所」を創るための試みの始まりでした。

設立にご尽力いただいた大橋元校長先生、活動を大きく広げていただいた石井前校長先生、すべての事業に休日返上で積極的にかかわっていただいた諸先生方やＰＴＡ・育成会、多くの地域のみなさんのご協力をいただきながら、「更級らしさ」「更級だからできること」を大切に考えて手探りで事業を進めてまいりました。この間、本当に多くの皆様のご理解とご協力をいただきました。改めて御礼を申し上げます。

これまでに「囲碁教室」「朗読の会」「更級発見隊」「親子料理教室」「親子環境教室」「おやじの会・親子スキー教室・冠着登山・親子キャンプ・コーラス更級」「育成会・親子たこ作り教室・たこあげ大会」などの事業を行ってまりました。子どもたちの楽しそうな笑顔と成長に支えられ、「更級の子どもは幸せだね」とか「更級小学校はすごいね」など、他の地域のみなさんから声をかけていただけるのも励みになりました。今後も事業の充実を図ってまいりますので、より多くの皆様のご参加をお願いします。

今回、コネット更級の活動に一部、文化庁の補助をいただき「さらしなの里羽尾の民話」を発刊できることになりました。この民話集は野本洋子さん主催の「朗読の会」で使われていた冊子で、地域の大先輩で郷土史家の故塚田哲男さんの原案・初版によるものを第二版として、野本洋子さん・荒井君江さんに再編集していただいたものです。地域に根ざしたたくさんのお話が、懐かしい方言と手作りの挿絵とともに語られています。

さらしなの里に暮らす皆様に、地域の宝を次の世代に伝える「故郷の民話集」として、孫子の代まで語り伝えられることを祈っています。

（コネット更級世話人代表・海野政也）

ホントにうまかった豊味さんの千曲どんぶり

子どものころ、食べておいしかったものに「千曲どんぶり」があります。芝原地区で食堂を営んでいた「豊味」さんのお品書きの一つで、スライスした鯉の切り身のフライを卵と玉ねぎと一緒に甘辛じょうゆで煮てご飯に載せたものです。よくわが家にも出前をしてくださった豊味さんの奥さん、坂田みよさんが今もご健在です。

千曲どんぶりは藍色の磁器に蓋がついていて、坂田さんが家族分の丼をお盆に載せて「お待ちどうさま」と上がり口に置いてくれました。丼がカキンとあたる音が食欲をそそりました。蓋を開けると、中がほどよく蒸れていて鯉独特のほろくさみの香りが立ち昇りました。グリーンピースも添えられていてこれがまたうまかった。蕗の苦味は苦手でしたが、あの鯉のほろくさみはおいしかった。四十歳になってもう一度と思い、自分で鯉の洗いを買ってきてフライにしてやってみましたが、どうにも違いました。

それで坂田さんに聞いてみたのですが、あの鯉のフライは刺身のようには洗っていなかったそうです。上山田温泉の川魚店でご主人の豊志さんが鯉を買ってきて三枚におろし、それをそのままスライスし、フライにしていたそうです。刺身はくさみを取るために一旦湯をかけ、それを冷水でしめたものだそうで、ほろくさみを消さなかったから、あの味わいが出ていたわけです。

豊味さんが店を出したのは昭和四十三年（一九六八）。それまでは農業をしたり勤めをする傍ら、千曲川の河川敷で川魚料理を提供するつけばも営んでいた豊志さんがその腕を生かし、奥さんのみよさんとお二人で始めました。豊志さんの得意料理には、ほかに「すずめ焼き」がありました。みよさんによると、千曲川で投網をしてはジンケンやフナなどの小魚を獲ってきて、それを開いて串刺しにし、一度唐揚げし、それを甘じょうゆにつけて焼いたものだったそうです。その姿が本物のすずめ焼きに似ていたからでしょう。上の写真で豊志さんが手にしているのはそのすずめ焼きだと思われます。

鯉のフライを卵と玉ねぎでとじる ほろくさみが絶品

千曲どんぶりもすずめ焼きも豊志さんの命名だそうです。千曲どんぶりは「近くに千曲川があるから、これは千曲どんぶりにするだ」とおっしゃっていたそうです。

更級地区では数少ない食堂でしたから、にぎわいました。青年団、消防団、ＰＴＡも宴会などに利用し、農協の会合ではよく千曲どんぶりが出ました。「カツ丼より少し安く、そのせいもあってよく売れていた」とみよさんはおっしゃっています。

残念ながら、豊志さんは創業から四年ほどで体調を崩し、息子さんの優さんが勤めをやめて店を手伝い、優さんの奥様の静子さんも出前などをして支えました。昭和五十三年（一九七八）に店を閉めました。私は一度だけ小学生のころ、創業して間もない店に行ったことを覚えています。母に言われて、すずめ焼きを買いに行きました。おつかいです。豊志さんは六十七歳でお亡くなりになりました。

豊味さんの川魚料理はとてもオリジナルでした。豊味の屋号は魚を獲るのが好きで味がいいからと豊志さんが付けたそうです。下の写真は創業当時、店の前で撮影したもので、左から豊志さん、みよさん、豊志さんの弟の弥平さんです。写真はみよさんからお借りしました。**（大谷善邦）**

篤志と犠牲で穿った冠着トンネル

おらほの冠着 18

明治十三年（一八八一）、後に更級村初代村長となる塚田雅丈さんは、御麓（みろく）区の上方、旧坂井村との境になる古峠の下、七十間（けん）に六尺四方のトンネルを開こうとした。奈良、平安時代、東山道の支道だった往古の往来を復活しようと発起人になった。羽尾村、坂井村の有力者の賛同を得て、楪葉（ゆずりは）地籍付近から工事を始めたが、トラブルが発生し頓挫した。

明治二十七年「冠着山復権運動」の最中、鉄道の篠ノ井線が羽尾を通過することになり、雅丈さんは早速、郷嶺山付近に停車場を設置しようと近隣の村々の協力を得て、通信省へ嘆願書を提出した。しかし、地形と給水用の水の問題で、今の姨捨駅付近が選ばれた。

とはいえ、北信と中南信を結ぶには冠着山の下をトンネルで結ぶのが一番のルートだ。長さは二千六百五十六メートル。当時は日本で二番目に長く、明治二十九年より、五年の歳月をかけて完成した。

トンネルは冠着を挟（うが）んで双方から穿たれたが、資材は屋代から運ばれ、向こう側の麻績方面には猿ケ馬場峠、一本松峠経由で運ばれ、羽尾側は八幡村代（だい）経由で冠着トンネル口まで牛がトロッコを引き、資材を運んだ。そのとき利用されたのが、明治十三年に塚田雅丈さんらが整備した道路で、その両側には官舎や飯場ができてにぎわった。

代から上る道は「牛道」と呼ばれ、これも雅丈さんが鉄道省の依頼で、在来道路の改良、新道開設でつくった道路。この道は後に、村人の要請で明治新道と名付けられた。

冠着トンネルの工事は困難で死者が多く出て、明徳寺の桑沢義覚和尚さんがトンネル近くの飯綱堂敷地内にねんごろに埋葬した。この地は墓石になる石が一つもなく、労務提供した星野工業の仲間たちは痛く悲しみ、トンネル入り口の斜面に供養碑を建て冥福を祈った。昭和五十年に塚原弘真和尚さんは、明徳寺境内に御霊を移して「三界萬霊塔」の供養碑を建て百三十名の精霊を供養し、今も弘昭和尚によって供養が続けれている。寺を参拝の折りは、手を合わせてください。

（大橋静雄）

冠着トンネル入り口に立つ犠牲者供養碑

古峠下のトンネル工事用に整備された楪葉付近の道路の石垣

明治新道開設の記念碑

本年四月から前館長の小松勝さんの後任として、お世話になることになりました。改めて地域の歴史に触れ、今まで遠く置き忘れていた千曲川や野山で遊んだ少年時代の思いでが鮮やかに蘇ってきます。友の会、地域のみなさんのご指導、ご支援をいただきながら、館の発展に尽したいと思います。新スタッフの安藤節子（左）、濱田景子（右）ともどもよろしくお願いいたします。**（福島修）**

〈編集後記〉 友の会だより第18号をお届けします。今号の編集委員会では話題がたくさん出て、盛り込むことができなかったことがいくつもあります。次号以降、執筆やインタビューなどのお願いに上がることがあると思いますので、よろしくお願いします。

冠着山・仙石登山口にある山の神の赤松は、今回写真を撮るにあたって初めてよく眺めました。小松前館長がお書きになっているように水平に十メートル余り張り出した枝は見事です。どうしてこのような威容を呈しているのでしょうか。

昨年の縄文まつり第15回を記念して出版した本「里と人にいやされる『さらしな』」は、おかげさまをもちまして制作費が回収できました。多くのみなさんのご協力のたまものです。残部が少なくなりましたので、ご希望の方はお早めにお求めください。一冊一〇〇〇円です。

編集・発行
さらしなの里友の会だより編集委員会
事務局・さらしなの里歴史資料館
〒三八九-〇八一二
長野県千曲市大字羽尾二四七の一
電話　〇二六（二七六）七五一一
Fax　〇二六（二六一）四一六一